

2022年1月23日（日）

宣教 『イエスのいやし』

聖書：マルコによる福音書7章31節～37節

◆耳が聞こえず舌の回らない人をいやす

31:それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。

32:人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。

33:そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。

34:そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エッフアタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。

35:すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。

36:イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。

37:そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

皆さま、おはようございます！

今日の聖書の個所は、イエスがシリア・フェニキアの女のイエスに対する信仰に感動され、娘をいやされた個所の続きです。

イエスは、耳が聞こえず舌の回らない人、今であれば聾啞（ろうあ）の人をいやされたのです。

31:それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。ティルス 地方はユダヤ人から見れば、外国の地、異邦人の地と見なされていました。聖書によれば、いやしを行ったイエスは、その後、北へ向かいシドンの町をへて今度は南に下り、デカポリス地方を通して、宣教をスタートしたガリラヤ地方に戻られたようです。この行程は地図からは少し分かりにくいのですが、大回りをしてガリラヤに戻られたと思われます。ちなみにデカポリスは、「10の町」という意味があります。イエスは最短コースでガリラヤには帰らず、宣教、伝道

の旅をしながら、土地の人々にも出会い、巡回伝道者として活動されたのです。巡回伝道者と言えば、伝道者パウロや、時が経ってメソジスト教会を起こしたジョン・ウェスレーを思います。

また明治期の淡路島伝道の開拓者とみられる河辺貞吉の姿を思います。河辺貞吉は福良キリスト教会設立や洲本教会の設立にも影響を与えました。数々の困難の中、淡路島中を巡回してイエスの福音を淡路島の人々に伝え回ったのです。

ところで、この時イエスと弟子たちは一緒だったのではないかと思ったのですが、聖書には弟子の姿はここにも出て来ません。あるいはイエスさま一人だったのかもしれませんが。

伝道は一人から始まることを思わされました。神さまの息を吹きかけられ一人から牧師・信徒に関わらず福音伝道はスタートするのです。それは今日でも当てはまる事だと思います。

一人は弱くとも神共にいます時、それはすでに力を得ているのです。信仰の炎の力です。憐みの神さまが選ばれ志を与えたその一人の人と共に働いてくださるからです。

さて、主イエスはガリラヤ地方に戻って、いやしの働きを行われました。

32:人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。

人々が、イエスを待っていたかのように耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来たのです。そして「その上に手を置いてくださるようにと願った。」のです。本当に親身になっていやしを願った人々もいれば、イエスの噂を聞いて興味半分で集まって来た人たちもいたことでしょう。わたしたち人間は、珍しい所には集まるのです。しかし、小さくても目立たなくても、真実を求めて集まる人もいるのです。

そこで、イエスさまはどうされたでしょうか。。

33:そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、。

ここが大切なポイントだと思います。「そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、」とあります。集まっていた人々、群衆の中から、この人だけ、耳が聞こえず舌の回らない人だけを連れ出されたのです。つまりイエスとの出会いは、1対1の中で、人格的な関係の中で起こる出来事なのです。

わたしは20歳の時に大阪の小さな教会で洗礼を受けましたが、洗礼を授けてくださった牧師は30歳ぐらいの若い牧師でした。谷口征樹という名前の北海道帯広出身の方でした。この牧師はその後、33歳の若さで突如天に、召されました。本当に心のあったかな人でした。この牧師との出会いがあったので、

わたしはイエスさまに出会えたのだと思えるのです。きっとみなさまにもそのような出会い、神さまの備えてくださった出会いがあったのではないのでしょうか。牧師との出会いだけでなく、家族との出会い、知人、友人との出会いを通しての人格関係を通して愛なるイエスを、神さまを知っていくのです。

イエスは、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられたのです。このようなやり方、方法は約2000年前当時のイスラエル地方の民間療法であったとも言われています。

聖書によれば、

34:そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エッフアタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。

「天を仰いで深く息をつき、」とあります、天を仰ぐとは、神さまに祈ることです。また「天を仰いで深く息をつき、」という言葉は、他の聖書の訳では「天を仰いで呻き」と訳されています。イエスさまの病人を深く思う呻き声が聞こえて来そうです。ロマ書8章23節にもこの「呻く」という言葉は出てきています。目の前にいるこの人と思う、イエスさまは天を仰いで神に祈り、この人の言葉にならない苦しみを思う呻き声をあげたようにわたしには思えるのです。それゆえ、イエスさまの祈りは、この目の前にいる人を深く思う、とりなしの祈りです。「神よ、憐み給え！」との。

そして、

「その人に向かって、『エッフアタ』と言われた。」。「エッフアタ」というのは、イエスさまが日常で使われていたアラム語で「開け」という意味です。

覚えておきたいのは、イエスさまは、神への祈りと行いと言葉でこの人をいやされたということです。ここにイエスの愛があります。神の愛の働きが起こったのです。全能の最善をなしてくださる愛なる神に従うイエスは、神さまがことを起こしてくださると、幼子のようにアッバなる父を全面的に信頼しておられたのです。ですからイエスの奇跡が愛なる神さまの働きなのです。

この救いの出来事は旧約聖書イザヤ書35章5～6節(P1116)にも預言されていた神の救の業なのです。神への祈りと行動と言葉が、今日も求められているのです。そこに神さまの善き力が働き、良い働きがわたしたちの周りに広がって行くのです。

35:すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。 本当に感謝すべき、すばらしい事が現実起こったのです。

35:すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができる

ようになった。

これは単に耳が聞こえ、発声ができるようになったということではなく、この人は神さまに造られた大切なかけがえのない人であること。人々の中から連れ出し、イエスさまと共に、人と人との関係の中を安心して生きて行けるようになったということだと思えるのです。

この後、イエスはひと言、人々に指示されました。

36:イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。

しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。わたしたち人間の口に鍵をかけることはできないということなのです。

37:そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

すばらしい人を生かすいやしの働きが行われました。と同時にこれ以後、主イエスの十字架への歩みも一歩進むことになったのです。

主イエスは人を助けつつ十字架に向かわれたのです。

最近出版された尊敬する島田 巖牧師の「真夜中のワーキング」という「歌集」があり

ます。その中から

「ケノーシス」という項目にまとめられた一つの歌を紹介させて頂きたいと思います。この「ケノーシス」とは、ギリシア語で「空っぽ」という意味です。新改訳聖書の訳では「ご自分を空（むな）しくして」と訳されています。

フィリピの信徒への手紙 2 章 7 節に、出て来る大切なことばです。

「イエスとは自分の弟子に捨てられて抜け殻になった神の独り子」。

イエスさまは自分の愛した弟子たちに捨てられたのです。そして、空っぽになった神の独り子だと思うのです。

わたしは、この歌から、イエスさまの十字架に至る苦難の深さと、深い深い愛を思わされ胸が震えました。

「イエスとは自分の弟子に捨てられて抜け殻になった神の独り子」。

私たち主イエスの深い愛を思いながら、希望を持ってオミクロン株の猛威の中をもうしばらく耐え忍んで過ごしましょう。 主の平安を祈ります。